



よみがえる グリーンライン

～松枯れと野犬と暴走族と、不法投棄のゴミの～



グリーンラインを愛する会
理事長 丸山 孝志

大変な活況を呈していた福山グリーンラインから、わずか数年で潮が引くように来訪者が減って、6年後の1980年4月について無料化されて一般県道に格下げされてしまいます。この時からグリーンラインのすさまじいまでの荒廃が始まりました。

最初は暴走族のグリーンラインへの流入でした。当時の暴走族は「サーキット族」とよばれて、街道をレース場に見立ててその運転テクニックを競うのが主流で、毎夜のようにパトカーとの力一チエイスが繰り広げられました。急速に路面は荒れ、ガードレールは無惨に破壊されました。これに松枯れによる森林の荒廃が加わり、来訪者の減少にさらに拍車が掛かります。人気の無くなったグリーンラインは格好のゴミ捨て場となりました。家庭ゴミや産業廃棄物だけではなく、車やバイク、犬や猫、人間の死体までもが捨てられ、怪奇現象の噂まで広がりました。

やがて福山グリーンラインは「松枯れと野犬と暴走族と、不法投棄のゴミのグリーンライン」と呼ばれるようになりました。

たまにかねて1985年には特に事故が多かった自動二輪車が通行禁止となりました。

私が「グリーンラインを愛する会」を立ち上げた2000年頃にはもう、昼間でも人が来るような場所ではなくなっていました。

「グリーンラインを愛する会」はある人たちとの出会いが契機でスタートしましたが、その時には「瀬戸内海国立公園鞆の浦を見下ろす絶景の場所を、もう一度市民の憩いの場所、観光スポットとしてよみがえらせよう。」と話し合っていました。「沿線を福山一の桜の名所にしよう。」という夢もありました。

「行政が手に負えないのなら、我々市民の手でグリーンラインをよみがえらせよう。」そんな気負いました。

しかし、現地での活動を始めた途端に、私たちはどれほど無謀な挑戦を始めたのかを思い知らされることになりました。

「まずは現地調査」と現地の状況を確認しに出かけましたが、調査も何も洗谷から入ってすぐの場所から、道路のほとりはものすごい量の草が茂り、延々とごみが捨てられて途切れる事がありました。

おまけに少し風が吹けば何本もの枯れ松が道路をふさぎます。後山園地はごみとカラスで車を入れるのさえ難儀でした。車を止めると10頭ではきかない野犬たちが駆け下りてきて車を取り巻き、車から降りる事すらできませんでした。

一人では危険なので仲間と公園の調査をしに車を降りましたが、展望台に上がる車路以外は人が歩けないほど草が茂り、展望台もトイレも落書きだらけ。トイレにはうずたかく大便が積み上がり、蜘蛛の巣が張り、長い間誰も掃除をしていない事は明らかでした。帰りの車の中では誰も口を利く事はありませんでした。

「いったいどこから、何から手を付ければよいのか？」それすら思いつきませんでした。

その夜。私は私の直情的な性格を呪いました。

巨大な風車に立ち向かうドン・キホーテの姿がダブりました。



沿道の不法投棄のゴミの山